

令和8年度 世田谷区立烏山小学校 校内研究

校内研究は、児童の資質・能力の育成と、それを支える教員一人一人の指導力向上を一体として推進し、日々の授業改善につなげることを目的としています。

1 研究主題

「自ら学びをデザインする児童の育成」 —国語科物語文の授業づくりを通した教員一人一人の指導力向上—

2 目指す児童像

「自ら問いを持ち、課題を解決する子」

3 目指す教師像

「児童一人一人の学びに寄り添い、自らも学び続けながら授業改善に取り組む教師」

4 研究主題設定の理由

本校では、令和4年度から令和6年度まで「協働的な学びのよさが分かり、生かそうとする児童の育成」を研究主題として研究を進めてきた。その結果、児童が対話を通して互いの考えを広げたり深めたりする姿が見られるようになり、教員も探究的な学びのサイクルを意識した授業づくりを進めることができた。協働的な学びの価値については、児童の姿やアンケート結果からも一定の成果が認められている。一方で、協働的な学びによって得た気付きや学びを、自らの課題解決や次の学びにつなげていく力については、更なる育成が必要であることも見えてきた。

昨年度は研究主題を「主体的に探究する児童の育成」とし、研究教科を国語科物語文領域に設定した。研究を通して教材研究の視点や学習内容の系統性への理解が深まり、特に若手教員にとって授業づくりの基盤を学ぶ機会となった。しかしながら、探究の全ての段階に手立てを設定したことで研究の焦点が広がりやすくなり、検証の視点が十分に明確にならない場面も見られた。また、校内研究が一部の教員の取組になりやすく、全教員が自分事として研究に関わるための工夫も必要であることが分かった。そこで本年度は、これまでの研究成果を生かしながら、児童自身が学習を見通し、調整し、課題解決に向かう姿を目指して研究主題を「自ら学びをデザインする児童の育成」と設定した。また、本校では昨年度に引き続き、研究教科を国語科（物語文領域）とする。国語科は、言葉による見方・考え方を働かせながら、言葉を通して理解したり表現したりする資質・能力を育成する教科である。中でも物語文の学習では、叙述を基に登場人物の心情や行動、物語の展開について考え、自分の考えを友達との対話を通して広げたり深めたりすることができる。本校では昨年度の研究を通して教材研究や授業づくりへの理解が深まりつつあることから、研究を継続し、日常の授業改善につなげながら教員一人一人の指導力向上を目指していく。

5 研究の基本的な考え方

本研究では、児童が自ら学びをデザインする姿を、

- ・自ら問いをもつ
- ・学習の見通しをもつ
- ・課題解決に向けて学習を進める
- ・学習を振り返り、次の学びにつなげる

という一連の探究のプロセスを主体的に進める姿として捉える。また、本校では世田谷区が示す「せたがや探究的な学び」の考え方を踏まえ「問い → 計画 → 実行 → 振り返り」のサイクルを基にして研究を進める。

6 今年度の研究体制

(1) 研究教科

国語科（物語文領域）

昨年度の研究を生かしながら、教材研究や授業づくりへの理解をさらに深める。

(2) 分科会

- ・低学年分科会
- ・中学年分科会
- ・高学年分科会
- ・専科分科会
- ・特別支援分科会

の5分科会とする。

(3) 研究授業

各分科会1本、年間5本実施する。

(4) 公開授業

昨年度の課題より、全教員の研究意識を高める手立てとして全教員が年間1回公開授業を行う。

- ・できる限り国語科（物語文領域）で実施する。※すまいるは除く。
- ・公開授業は、自己申告の授業に活用できる。
- ・指導案を作成する。細案の作成が様々な理由で困難な場合、本時案のみ作成する。学年（せせらぎ学級も含む）で共通の指導案を作成してもよいが、本時案については、各学級の児童の実態や学習状況を踏まえ、授業者が作成する。※すまいる、特別支援学級はこの限りではない。
- ・本来の趣旨とは異なるが、本人が細案の作成を行うことで、公開授業を年次研の授業として兼ねることができる。研究授業とは兼ねることはできない。
- ・公開授業は、教員一人一人が自身の研究課題について実践し、児童の姿から手立てのよさや課題を考える機会とする。そこで得られた気づきや学びを分科会で共有し、日々の授業づくりや指導力の向上につなげていく。
- ・年度当初の研究全体会で各教員が設定した研究課題及び分科会で共有・設定した研究課題を踏まえ、その課題について考えるための公開授業とする。公開授業後は、学年だけでなく分科会でも成果や課題を共有し、研究を深める。
- ・指導案は、Teamsの「⑩研究推進部」内の指定のファイルに保存し、必要に応じて印刷をして使用する。

7 今年度の研究の進め方

本年度は、教員一人一人が自身の課題意識や関心を基に研究を進めることを大切にする。そのため、年度当初に、それぞれが探究のサイクルの中で重点的に取り組みたい段階を整理し、分科会で共有する。

- ・問いの設定（中学年分科会）
- ・学習計画の立案（中学年分科会）
- ・学び方を選択する学習活動（低学年分科会、高学年分科会、特別支援分科会、専科分科会）
- ・振り返りの工夫

その上で、分科会として重点的に検証する視点を設定し、研究を進める。

探究のサイクル全体を意識した授業づくりはこれまでどおり継続しながらも、手立てとしては焦点を絞ることで、その有効性や児童の姿をより具体的に検証していく。

8 期待される成果

【児童】

- ・自ら問いをもち、学習への見通しをもつことができる。
- ・学び方を選択・調整しながら課題解決に取り組むことができる。
- ・振り返りを通して次の学びにつなげることができる。

【教員】

- ・国語科物語文の教材研究に対する理解を深めることができる。
- ・探究的な学びを支える授業づくりの力を高めることができる。
- ・校内研究を自らの授業と結び付けて捉え、日常の授業改善につなげることができる。

9 研究を通して目指すこと

本年度は国語科物語文研究の2年目に当たります。研究授業だけで終わる研究ではなく、日常の授業改善につながる研究を目指したいと考えています。また、研究を通して教員一人一人が教材研究や授業づくりへの理解を深め、「物語文の指導どんとこい」と自信をもって言えるようになることを目指したいと考えています。

児童が「できた」「分かった」「もっと学びたい」と感じるとともに、「物語文を読むことが楽しい、好き」と実感できる授業を目指し、教員もともに学び合いながら、学校全体で研究を進めていきたいと思います。